

# 改訂第2版の序

本書の初版の序文を執筆していた2020年1月上旬、その直後から「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」が猛威を振るいはじめました。その報道の第1報を見たときから、「こいつは、やばい！」と直感しました。これまでのウイルス感染症にはない、恐ろしい性質をもっていたからです。1つは、当時の従来株の潜伏期がきわめて長く、毒性も強いという性質、もう1つは、感染後、発症する前からウイルスが体内から出てしまうという性質です。そして、その対策として生まれたのが「クラスター」という概念と「3密（密閉・密集・密接）」を避ける政策です。それから、猛スピードで、mRNAワクチンが開発・実用化されました。このmRNAワクチンの開発に携わったカリコ氏らは、2023年のノーベル生理学・医学賞を受賞されました。このことは本書中にも記載しました。

現在、COVID-19は、オミクロン株が変異をくり返し、その亜系統がいまだに蔓延っています。ただ、人類社会はコロナ禍前の日常に戻りつつあり、もう少しの辛抱であろうと思っています。ところが、このコロナ禍による副産物も生まれました。それは、コロナ禍で消毒などが徹底されたため、子どもの頃に感染して免疫力をつけておくべき感染症に子どもたちがかかっていないのです。そのため、子どもたちの間で、RSウイルス感染症、手足口病、季節はずれのインフルエンザ、咽頭結膜熱（プール熱）などが大流行し、小児科医の先生方の苦労が絶えません。

一方で、食物アレルギーも複雑化しはじめました。これまで食物アレルギーは、I型の即時型であると学んできましたが、そうでもないことがわかつてきました。改訂版には、「遅延型食物アレルギー」や「遅発型アナフィラキシー」などを紹介しています。このように学ぶべき微生物学・免疫学は常に変化しています。

本書では、前版に引き続き感染症や食中毒、発酵食品に関する微生物を解説するとともに、これらの新たな知見や図表も増やし、管理栄養士・栄養教諭をめざす学生さんが、さらに勉強しやすい書籍となるよう努めました。特に多くの写真を掲載していますので、微生物の特徴を知り関心をもつきっかけとなれば嬉しい限りです。また、食品衛生監視員、養護教諭、保健師、介護士、理学療法士などをめざす学生さんやそれらの専門職に携わる現職の方々にも活用していただけたら幸いです。

なお、改訂版を発行するにあたっては、初版で執筆いただきましたそれぞれの専門分野の先生方にご協力をいただきました。この場を借りて心より深謝申し上げます。

最後に、本書「改訂版」の企画・編集・出版にあたり、多大なご協力をいただいた羊土社編集部の寺山七夢氏と田頭みなみ氏をはじめ、関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2023年10月

執筆者代表  
大橋 典男